

# フルトヴェングラー・センター® The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1st October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

Newsletter No.48 / 会報第 48 号 2017 年 5 月

## フルトヴェングラー・センター会員の皆様

今年は随分と桜の咲き始めが遅かったようですが、新緑の映える時期になり、汗ばむような日々が続くようになりました。今年の大連休は例年よりやや短め。じっくりと音楽に浸りたいものですが、世の中何かときな臭い話が続いております。政治と芸術は密接にして不可分とのことですが、これからどうなるのでしょうか。

さて、会報 48 号では以下の内容でお送りします。

## 目次

1. 桧山コレクション 第 11 回頒布 CD のご案内 P. 2~3
2. WFFC1604/5-HYM シューベルト交響曲第 8 番八長調 D944 に関するご感想 P. 3
3. 寄稿「桧山コレクションの復刻にあたって」連載第 5 回 薬師寺 純平 P. 4
4. フランス協会 CD の感想  
関西フルトヴェングラー・フェライン 代表幹事 田中啓介 P. 5~7
5. 書籍のご案内  
「帝国のオペラ《ニーベルングの指環》から《ばらの騎士》へ」広瀬 大介 著 P. 8
6. 第 76 回、第 77 回レクチャー・コンサートのご報告と記録ビデオ P. 8~10  
(DVD、ブルーレイ) 頒布のご案内
7. 第 76 回レクチャー・コンサートの感想 会員 中村 匠一 P. 10~11
8. 第 78 回、第 79 回レクチャー・コンサートのご案内 P. 12
9. 寄稿「続・フルトヴェングラーの手紙」連載第 15 回 会員 田中 昭 P. 13~15

センター顧問山口勗氏（ペンネーム 桧山浩介）から、愛蔵のフルトヴェングラーの78回転盤レコード（以下SP）コレクション全約170枚を寄贈いただいたことは会報第16号（2007年12月発行／曲目明細掲載）でご紹介いたしました。会報36号でご案内の通り、それらの中からSP盤をセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するための資料としてCD化し、ご提供することとして順次制作中です。

今回のWFFC1701-HYMは、フルトヴェングラーによるSP時代のベートーヴェン作品の録音から『交響曲第4番変ロ長調作品60』（EMI録音 1950年1月25・30日 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）を復刻します。

フルトヴェングラーのベートーヴェン4番といえば、1943年のベルリン・フィルとの戦中録音や、1952年、ウィーン・フィルとのLP録音が有名ですが、これらの録音の陰に隠れがちとはいえ、これも聴き逃がせない名演奏です。



フルトヴェングラーによるEMIへの録音は1950年からテープ収録に移行しますが、今回復刻した交響曲第4番は、交響曲第7番（WFFC1403-HYMに収録）、シューベルトの交響曲第7番『未完成』（WFFC1603-HYMに収録）、R.シュトラウスの交響詩『死と浄化』に続いて行われました。1952年12月に同曲のLPの為の再録音が行われたので、この1950年録音はあまり顧みられることがなかったのですが、1952年に倒れる前の戦後の気力充実したフルトヴェングラーの力演が聴かれます。

今回は、「各面をつながない版」と一貫した「つなぎ版」を1枚に収めます。この演奏からわずか2年後に再録音されたということもあり、SP盤としての発売数も少ない希少な盤であることもありますし、面の切れ目での処理が少し違っているようにも思いますので、会員の方々に是非スタジオの雰囲気もお楽しみいただこうと考えた次第です。

SP/LP再生には、GE社のバリレラ型カートリッジを中心に、自作イコライザーを通してDSD収録を行い、その上でハイレゾ・アナログ変換してノイズ処理を行うなど、細心の注意を傾けて行っています。もちろんピッチの検証も行っています。これにより、これらの演奏の新たな魅力を感じ取っていただけるのではないかと思います。

なお、今回の復刻にあたっては、オランダHMV盤を使用しておりますが、チリチリノイズが、これまでの桧山コレクションの中でもやや強めに出ておりますので、悪しからずご了承ください。

WFFC1701-HYM

## ベートーヴェン作曲 交響曲第4番変ロ長調作品60

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1950年1月25・30日録音 ウィーン・ムジークフェラインザール)

### CD 申込方法

1. 頒布資料代：1,600円（送料込み） 同封の郵便振込票をご利用ください。
2. 申込締切り日： **2017年 5月31日** 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加プレス・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
3. 発送予定：平成2017年7月上旬



## WFFC1604/5-HYM シューベルト作曲 交響曲第8番八長調 D944

### 『ディー・グローセ (ザ・グレート)』に関するご感想

(匿名希望)

いつもお世話になっております。

貴センターよりシューベルトの「グレート」が届きまして、早速聞かせて頂きました。

まずは、今回楽しみにしておりましたLPの音が大変素晴らしく、一気に聞き通しました。

貴センターから製作遅れの御連絡を頂いていささか心配しておりましたが盤質などに全く問題なく、満足しております。

これまでのLP復刻とは一線を画す復刻であると思います。貴センターらしい非常に丹念かつ繊細な再生であり、埋もれがち細部が実に自然に主旋律と共に聞こえてくる復刻技術が、LPという媒体と良く合ったからかと感じました。

LPが最初期盤という事で、いわゆる針音を気にしておりましたが、全くそのような事はなく、演奏の細部のニュアンスの再現との両立がどのようになされたのか不思議なほどです。といいますのも、これまでLP復刻においてノイズカットと高音部の鈍さは正比例するものと思っておりましたからで、その点からも今回の復刻は大変素晴らしいものであったと思います。

SP復刻も満足すべき出来で、確かに針音はLPと比べると大きくはありますが、SPならではの音はいつも通りの丁寧さで、LPとはまた違った満足感を与えてくれました。

今回のグレート復刻が丁度SPとLPの端境期にあるという事を思い起こすと、この復刻の意義は非常に大きなものではないかと存じます。

他の曲やインタビューもいつも通り大変良い音であり、特にロザムンデのダイナミックレンジの広さには驚くものがあります。追記で恐縮ですが、これを聞いた後、貴センターの《未完成》を聞き直しました。《未完成》もいつもの通り大変良質な復刻で、この曲のロマンティックな所が湧き出てくるように感じられる素晴らしいものです。演奏時間と相まって、愛聴盤となっております。

長くなりましたが今後の貴センターの発展を祈念しつつ筆を置かせて頂きます。

これからもこのような試みを期待しております。



寄稿

## 楡山コレクションの復刻にあたって (第5回)

(理事・薬師寺純平)

まず、楡山コレクションの頒布に関して、リリースが遅れがちになっていることをお詫び申し上げます。言い訳がましくなりますが整音、製盤に多大な手間がかかっていることが原因なのですが、この整音、製盤についてお話させていただきたいと思います。

以前、復刻にあたっては状態の良い盤を使うことが重要であることを述べたわけですが、それでもどうしてもノイズの発生は避けられません。それは英 MHV 盤であれば特有のチリチリノイズがありますし、ノイズの少ないアメリカ盤であっても少なからずスパイクノイズがあります。このようなノイズを軽減するためにこれまでよく使われていたのがハイカットフィルターです。

ただし、単純に高音をカットしたのでは大切な音楽の成分まで失ってしまいます。

下の図は WFFC1603-HYM、シューベルト「未完成」の冒頭部分 1 分弱の波形です。上が SP



盤から録ったそのままのもの。下が頒布した最終版それぞれの波形です。SP 盤から録ったそのままの波形には無数のトゲのようなものが見られます。これがパチパチというノイズとして聞こえます。これが下の方をご覧くださいと、トゲが全く見当たりません。



実はこのトゲを一つ一つ手作業で潰していくのが整音という作業で、テクニカル・アドバイザーの清水公典氏による気の遠くなるような作業なのです。次回は、このトゲの正体とその潰し方について説明をしたいと思います。

(つづく)

#####

## フランス協会 CD の感想

関西フルトヴェングラー・フェライン

代表幹事 姫路市 田中啓介

関西地区のフルトヴェングラー愛好家を中心に、京都市衣笠山の麓、喫茶ムジークにて3ヶ月に1回、「関西フルトヴェングラー・フェライン」の例会を開催し、今回の2月25日にて9回目を数えることとなった。

今回はコア・プログラムとして、このたびフランス協会より頒布されたフルトヴェングラー/ベルリン・フィルによる1952年12月8日のウェーバー「魔弾の射手」序曲、

ベートーヴェン交響曲第3番「英雄」を取り上げた。前者はドイツ協会盤LPと、後者はアウディーテLPと音質比較を試みた。結果、前者は登場の拍手から収録した雰囲気豊かなフランス協会CDで鑑賞。後者は甲乙付け難く、幹事の提案で、第1楽章、第2楽章をアウディーテのLPで、第3楽章、第4楽章をフランス協会盤で鑑賞した。

例会後、会員から感想が寄せられたので紹介したい。

最初は、宇治市在住で、音楽以外に短歌にもご堪能なS夫人

「昨日は本当に有り難うございました。帰りの電車の中でも、真打ちの「エロイカ」がずっと響いて居ました。

1～2楽章はLPで、3～4楽章はCDでと、何回も聴かれた上で組み合わせを工夫して頂いた事に依るのででしょうか、最高に良かったと思います。気品がありますよね。」

次は、西宮市在住の、熱烈なモーツァルトの愛好家でもあるT氏

「(ディスク到着時)、自宅ではヘッドフォン鑑賞でしたので、ムジークさんの素晴らしい装置から大音量で聞いたのはとても良かったです。

LPとCDではどちらが良いかは音源そのものではなく、そもそも再生装置が異なるので判断が難しい(意味がない)ですが、アウディーテCDとの比較でしたら、仏協会のCDの音質が聞きやすいと思いました。

演奏は第1楽章のファンファーレのトランペットのミスが残念ですが、私の個人的な認識はフルトヴェングラーの「最高のエロイカ」であります。

ウラニア盤は確かに迫力がありますが、常時間くには力みがありすぎて少し疲れます。

その点、フルトヴェングラーはやはりベルリンではないか！と言わせるだけの堂々とした風格が感じられます。

彼の完成されたエロイカがベルリンの充実したアンサンブルを伴って味わえるのは心地よい気分になさしてくれます。これ以上を求める気もおきません。

違う意見があるのはもちろん重々承知しております。」

3番目は、遠く名古屋から参加して下さった、歴史的音源に造詣の深いN氏

「フルトヴェングラーの聴き比べですが、音源が手元にないので、当日聞いた印象でまとめてみます。

### □ 魔弾の射手

独協会 LP と仏協会 CD

2枚で音のバランスその他の違いを感じました。

独協会 LP は RIAS 音源によくある、マグネットフォン系統の少し金属を研いたような高

域を感じました。仏協会 CD はそうした癖がマイルドに聞こえたのと、残響音の立ち下がりが速かったです。残響音に関しては、特定のレベル以下で作動するノイズ・ゲート系か、それに近い処理の結果だと思いました。

どちらも迫力があり、52年の音源があれだけの音で聞けて楽しかったです。

ムジークさんの GRF が綺麗に鳴ってるなあと思いました。

#### □ 英雄

・ Audite LP と仏協会 CD

2枚の音のバランスは大きく違わなかったように感じました。ザラついた RIAS っぽさがなかったです。やはりオケの鳴りっぷりが素晴らしい！個人的に Audite の LP の方が好感を持ってました。

仏協会 CD は、残響音の消え方が速いと感じたのと、咳以外で聴衆の存在感がないことから察するにノイズ・ゲートの処理をした結果、静かな箇所での、聴衆の空気感にあたる帯域も削れた印象です。そこまでやったならテープのゴロもカットしてよかったかもしれません。フルトヴェングラーは聴衆・演者の高まりを音楽で返信していた人と思っているので、音源に聴衆の存在があったほうが楽しめると思っています。

聴衆も音楽の一部というか…会場全体をとりこんで、うねりを創り出しているからテンポが独りよがりでないだと再認識しました。その場に参加できないのが残念です。

50年代のフルトヴェングラーのベートーヴェン像がストレートに伝わりました。

40年代は40年代で素晴らしいエロイカが残っているので、30年代にどんな英雄を表現していたのか残ってたらなあと思います。」

最後は、フェラインきて、いや日本屈指のフルトヴェングラー愛好家、京都市在住の H 氏から頂いたコメント。

『この B P O とのライブによる CD は多少ノイズ軽減がなされている様ですが、解釈、演奏、ベートーヴェン的な表現などが特に素晴らしい！との賛辞を贈りたいと思います。巨匠の「エロイカ」の録音は 10 種類あったと思いますが、私は聴後、これが第 2 位となりました。

#### 1 位：1944年12月19日のウィーン・フィルとの「ウラニアのエロイカ」

これは仏初版盤の状態の良いものを、正常ピッチで聴くのが最も良いと思います。これは放送録音ですが演奏の詳細を簡単に申しますと、特に第 2 楽章以降は素晴らしく、中でも終楽章の後半、ポコ・アンダンテの部分は楽譜通りの正確さと、入念極まる表現に目頭が熱くなるのを覚えます。オーケストラも鳴り切っており、この高貴を極めた部分では（一寸大袈裟な表現になりますが）この時フルトヴェングラーだけに舞い降りた天啓による閃きもたらしたのを感じます。第 2 楽章もスラーの処理等、正確な中でフルトヴェングラーの特徴が全部出ており、すべてがベートーヴェン以外の何者も感じさせない程の名演です。それに続く短く活気のあるスケルツォと、トリオでのウィンナホルンの魅力が大きいく、トリオの最後にテンポを落して延ばす妙技等、ホルンの魅力を満喫させる部分もあります。第 2、4 楽章は 52 年のスタジオ録音の演奏より随分遅く、この為に全曲でも演奏時間が長くなっています。第 1 楽章は、「エロイカ」としては珍しくフルトヴェングラー流にテンポが動く表現で、特に再現部が著しく独特です。演奏時間も短くなっており、この楽章のガッチリした雄大な内容の表現とは少しかけ離れた感じも受けます。この楽章の表現と、後に続くスケールの大きな表現との間に違和感を持つかどうかによって、この演奏に対する評価が変わって来るかと思いますが、私はこの演奏の力強さと、若者の開拓精

神の様な風情が渾然一体となったところを評価します。また、全曲の中で目立つのは肝心な数か所を選んでのトランペットの強奏！これは痛烈・効果的で空前絶後。フルトヴェングラーが示した唯一の表現で、巨匠の特徴満開です。

## 2位：1952年12月8日のベルリン・フィルとの「エロイカ」

この演奏は、フルトヴェングラーの「エロイカ」の中でも最も遅いもので、曲自体の演奏時間が54分41秒と、スタジオ録音の演奏を2分以上超えており、スケール極大、表現も緻密で安定感があり、一般的に感じている「エロイカ」のイメージに合致し、その大きさに驚くものでした。ここまで堂々とした大きさの演奏は珍しく、しかも、これを最後まで感動的に聴かせる才知と腕前には舌を巻いてしまいます。「ウラニア」と最も異なるのは、第1楽章の捉え方でしょう。ここには「ウラニア」盤と違って、大きな岩をてこで動かすときのような力感に漲っています。テンポも展開部の中央でガタンと落ちる以外、殆ど安定していたと思います（ウラニア盤でも落ちるが、こちらの方が堂に入っています）。この豪快、龐大な第1楽章は、前者とどちらを採るか、大きな迷いどころです。ここでは長大な展開部が素晴らしく、「ウラニア」盤を凌いでいます。両者の第1楽章は上述の様にかかなり表現が異なっていますが、共に全曲の性格を決定する所なので安易に優劣をつけることは出来ません。私はこの両者には同等の評価を付けています。なお、このCDでは全曲を通して超低音を含めノイズが殆ど無いのが聴きやすく、これは大きな利点だと思います。

第2楽章以降は、次の点で「ウラニア」盤の演奏が優れていると思います。「ウラニア」で基本的に良いところは、表現の忠実度です。（例えば、スラーの切れている個所などで楽譜通り行っているところが多く、ほかの演奏より感動的な表現が見られます）。特徴を短く表すと、2楽章ではウィンナ・オーボエの沈痛な響き、3楽章での活気とホルンの魅力、終楽章での“プロメトイスの主題”以降での疾走する様な速いテンポと、一転してポコ・アンダンテでの身に沁みる表現など、特に優れている所が多いので、これらを無視する事が出来ない訳です。

フルトヴェングラーの「エロイカ」はこの2点があれば十分との思いになりました。次点としては、あと4点程（50年ライブのBPO、52年スタジオでのVPOとライブのBPO、53年ライブのVPO）が挙げられるでしょうか。』

以上、それぞれ含蓄のあるコメントに感謝。

幹事としては、小学生の頃から愛聴している52年のVPOとのスタジオ録音と比べて音色は地味（2楽章のオーボエや、3楽章のホルン）ではあるが、よりスケールが大きく、迫力のあるこの演奏を堪能させてもらったと感じている。比較のため3回ずつ家でCDとLPを通して聴いた感じで、特に1楽章2楽章は片面ずつたっぴりとカッティングしたLPの方がCDより多少聴き疲れしないような気がして、前半楽章LP、後半CDを提案した。いずれにしても博士の優れた遺産が素晴らしい音質のCDで聴けることを喜びたいと思う。

北野天満宮の梅が満開の頃、ムジークさんの薫り高いサイフォンからのコーヒーを飲みながら、至福の時間を過ごしたことをご報告したい。

京都で3ヶ月に1回、前半は様々なクラシック音楽、後半はフルトヴェングラーと、フルトヴェングラーに関わりのあった音楽家のディスクにて例会を行っているので、是非気軽にお越しいただきたい。

#####

## 書籍のご案内

「帝国のオペラ《ニーベルングの指環》から《ばらの騎士》へ」

広瀬 大介 著



いまさら申し上げるまでもなく、広瀬大介博士にはこれまでワーグナーのオペラを中心に、数多くのレクチャー・コンサートにご登場いただき、いずれもが最新の研究成果も踏まえた質の高いお話をしていただきました。

本著は、博士がレクチャー・コンサートを通じてたびたび言及されて来た、芸術と政治との関係－芸術作品を生み出した政治的社会的背景－が大きなテーマになっています。

私たち音楽ファンは、作曲家の生涯を通じて作品をより理解しようとはしても、大きな歴史のうねりの中で、その作品がどのように誕生したかまでは、なかなか考えが及ばなかったように思いますし、同時代の作曲家たちがお互いに影響しあったこと、さらにオペラの諸作品相互の歴史的、政治的、様式的にどのように影響しあい変遷していったのかについても、見逃しがちであったように思います。

実はこのようなことは、博士がこれまで幾度となくお話をされてきたことなのですが、本著によってそれが改めて体系だって理解できたように思います。

言うまでもなくフルトヴェングラー自身が政治に、戦争に翻弄された音楽家の一人です。あの一連の戦中録音や戦後の復帰コンサートから晩年に至る祈りのような演奏を通じて、私たちが得てきた深い感銘について、本著を通じて改めて考察を深めることができるかもしれません。

なお、本著のあとがきで、博士からセンターへの謝辞が書き添えられております。本著の出版にセンターが微力ながら協力できたとすれば、この上ない喜びであると思います。

#####

## 第76回レクチャー・コンサート（講師：松本 大輔 氏）

第76回レクチャー・コンサートは、第68回にご講演いただいたアリアCDの松本大輔氏に再登場いただきました。今回は、ブラームスの交響曲第1番です。

フルトヴェングラーが残したこの曲の全曲録音はすべて戦後録音で、その数は7つのオーケストラで10種類にも及びます。これらを一つ一つ順を追って第1楽章をすべて、そして最後には、第4楽章しか残されなかった1945年1月のベルリンでの録音を聴きました。

それぞれの録音年代やオーケストラの違いによる音の違い、演奏の違いが体系だって理解できるとともに、最後に聴いた1945年の第4楽章は圧巻の名演奏で、計り知れない感動を得ることもできました。



いずれもSP、LP、CDから最も優れた音質のものを選択し、1951年の北西ドイツ放送響との演奏で選択したビクターのRCL盤ではイコライザーカーブにNABカーブを選択するなど、再生方法にも留意をしました。



## 第77回レクチャー・コンサート（講師：広瀬 大介 博士）

第77回レクチャー・コンサートは、第72回に引き続き、広瀬大介先生をお招きしての「トリスタンとイゾルデ」第3幕についてのお話です。

今回は1862年～1865年までの初演計画の失敗からルートヴィヒ二世との関係、そして『指環』の作曲再開から『トリスタン』初演までの過程についてご説明いただき、引き続き第3幕についてのお話へと続きます。第3幕では何が起こったのか？第1幕の前奏曲との関係、『愛の死』に至るモチーフの関係などを詳しく解説していただきました。

そして当日再生したのは、前回同様東芝のフルトヴェングラー（旧）大全集。独エレクトローラのカッティング・マスターの日本プレス盤（赤盤）です。

## 頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにDVD-Rとブルーレイ・ディスクで頒布いたしますのでご利用ください。

また、引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、鑑賞に使用した音源をブルーレイ・ディスクでは、PCM無圧縮ハイレゾ音源として収録しました。DVDは48kHz、16ビットのリニアPCMです。

松本大輔さんにベートーヴェンの第5番についてお話いただきました**第68回についても、改めてPCM無圧縮音声で再編集**し、より高音質でお楽しみいただけるよう改訂版をご用意しました。

### 第76回

DVD-R（2枚組）版

WFER1701-A/B ￥3,400

ブルーレイ版

WFER1701-BD ￥3,200

### 第77回

DVD-R（2枚組）版

WFER1702-A/B ￥3,400

ブルーレイ版

WFER1702-BD ￥3,200



## 第68回（リニアPCM音声改訂版）

DVD-R（2枚組）版

WFER1505-A/B-R ￥3,400

ブルーレイ版

WFER1505-BD-R ￥3,200

すでに旧盤 WFER1505-A/Bまたは WFER1505-BDをお求めいただいた会員の方々は、それぞれ¥1,000 ずつ割引いた金額（DVD¥2,400, ブルーレイ¥2,200）でご購入いただけます。いずれも当日配布資料と送料込みです。この会報に同封した振込用紙の該当箇所に○を記入してお申し込み下さい。なお、発送はご入金確認後2週間程度の御容赦を下さいますようお願い致します。



## 第76回レクチャー・コンサートの感想

（Face Book の投稿から）

（理事・中村匠一）

千石の「沖ミュージック」で行われた、フルトヴェングラー・センターの第76回レクチャー・コンサートから帰ってきたところです。本日の講師は名古屋のクラシック専門のCDショップ「アリアCD (<http://www.aria-cd.com>)」の松本大輔さん。前回のベートーヴェン第五に続いて二回目のセンターでの講演となりました。

本日のお題はブラームスの交響曲第一番。松本さんが製作されたフルトヴェングラーの年表を見ながらのお話だったのですが、この「ブラー」の全曲録音はすべて戦後のものなのですよ。私もフルトヴェングラーを聴き始めてから割と長いのですが、戦前・戦中の全曲録音がないという事は知りませんでした。お恥ずかしや・・・(^\_^;; それにしても、戦後の録音だけで10種類もあるのですから、それを全部今日だけで聴くのはとてもじゃないけど無理、という事で、その10種類の「ブラー」の第一楽章を集中して聴いてみよう という、センターじゃないと出来ないような企画になりました（笑）。

クラシックファンには先刻ご承知の事と思いますが、このブラームスの交響曲第一番はベルリン・フィル黎明期の指揮者、ハンス・フォン・ビューローが「交響曲第十番」と冗談を言ったほど、ベートーヴェン的な起承転結のハッキリした、非常に緻密に構築された音楽になっています。吉田秀和先生の言葉を借りれば「筋肉質」の音楽と言えるでしょうか？ そういう意味では松本さんが前回担当された「第五」に通じるものがありますね。

元々がそういう音楽であるので、10種類あるフルトヴェングラーの「ブラー」も基本は楷書体の折り目正しい演奏になっている感があります。ただ、やはり勝手知ったる仲であるベルリン・フィルやウィーン・フィルとの演奏は、その中でもより自由度が高い、というか、そのオーケストラや会場の特徴を活かしたものになっていますね。

例えば、松本さんが「この一枚が無ければ、私は今の仕事（アリア CD）をやっていなかったかもしれない。」という DG の 1952 年 2 月のティタニア・パラストでのベルリン・フィル創立 70 周年のライブは重厚な低域を土台に、巨大な建築が積みあがっていくようなスケールを感じさせますし、同年 1 月の楽友協会ホールでのウィーン・フィルとのライブでは、弦の細かいアーティキュレーションが、聴きなじんだフレーズをより新鮮に聴かせる、入念な神経が張り巡らされています。

この二つの演奏をフルトヴェングラーの「ブラー」の最も完成した形と捉えることもできますが、他の演奏の価値が下がるかということ、私はそんな事はないと思います。フルトヴェングラー・ファンの中でもかなり酷評の対象になっていると言われていた、「ブラー」のラスト・レコーディングであるヴェネズエラ交響楽団との演奏でも、最初はフルトヴェングラーも、楽団員も手探りのような状態から、お互いの感覚が徐々にシンクロしていく様子は、感動的ですからあります。松本さんが「およそフルトヴェングラーの演奏で『記録として残さない方が良かった』等というものは無い。」とキッパリと言われた事に私も完全に同意します。

この 10 種類の「ブラー」第一楽章を聴いて、私が改めて思った事は、至極ありきたりではありますが、「演奏」という行為は作曲家が譜面に込めた思いの「再創造」であるという事です。なので、譜面を見ようが、暗譜で振ろうが、テンポが一律であろうが、それが自在に動こうが、それはその演奏家を通じた「主観的行為」にほかならない、という事です。

チェリビダツケの言行録にあるように、彼がフルトヴェングラーに、とある曲のテンポについて尋ねたところ、「それがどう響くかによる」という答えが返ってきたというのは有名な話です。チェリビダツケはこれを「啓示」と語っていましたが、今日の 10 種類の録音でもその会場の響きや奏者の技量がテンポにも反映されていることがハッキリ感じ取れました。翻って言えば、松本さんが「限界を通りこしている」と言われた、フルトヴェングラーの晩年に至るまでの常軌を逸した回数に及んだツアーや客演活動は、その「再創造」の可能性をあらゆる場所で探求したい、そしてその体験を可能な限り多くの人と共有したいという、飽くなき音楽への愛に支えられたものだと思うのです。

だからこそ、終戦間際の 1945 年に録音された「ブラー」の第四楽章のみの録音、もはや廃墟となりつつあるベルリンの中で、演奏する方も、聴いている方も明日の命があるかわからないという状況下で行われたライブには、もう音楽を聴くというよりも、その戦時下のベルリンの人達の思いが時空を超えて伝わってくるような切迫感と熱気がありました。もう戻ってこないその瞬間のかけらだけでも人の心を揺り動かすには十分なだけの力が音楽にはある。最後の音が鳴り終わった後、絶句して言葉が出ない松本さんの姿を見て、再生音楽もまた一期一会であり、だからこそこういう感動を共有できる場は大切なのだと思いました。

松本さん、本日も大変お疲れ様でした。有難うございました。そして、WF センターの会長である中村さんと、素晴らしい音を今日も提供してくれた薬師寺さん、WF センターのスタッフの皆様と参加者の皆様に心からの感謝を申し上げます。今日のレクチャー・コンサートもいずれ Blu-ray になるとはと思いますが、楽しみにしております。

#####

## 第78回 レクチャー・コンサート開催

開催日時： 2017年5月28日(日)

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 広瀬 大介 博士

広瀬大介博士がブルックナーの交響曲の中で最も愛する、交響曲第5番を名解説とともにお聴いただきます。会場でのLP再生も充分お楽しみください。

## 第79回 レクチャー・コンサート開催

開催日時： 2017年7月16日(日)

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 船木 篤也 氏

船木氏が第74回レクチャー・コンサートで、シューベルトの“Die Grosse(ザ・グレート)”なくしてこの曲の成立はあり得なかったという、シューマンの交響曲第1番「春」についてお話いただきます。

○参加費：

第77/78回とも センター会員1000円、(非会員2500円)

○会 場：沖ミュージック・サロン

○お問い合わせ、予約：

電話またはEメールで下記まで。満席の場合はご入場いただけませんので、できるだけ予約ください。キャンセルは前日までにお願いいたします。

TEL：080-660-33-444

(電話でのお問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いいたします)

Eメール：info@furt-centre.com

終了後、引き続き講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は2000円程度で、当日会場でもお申し込みをお受けいたします。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？

#####

「続・フルトヴェングラーの手紙」 連載第 15 回

会員 田中 昭

今回の手紙は、イギリス・ロンドンの有名な楽譜出版社 ブージー・アンド・ホークスの担当者にバルトークや R. シュトラウスの楽譜を発注したものだ。では読んでみよう。

手紙番号：17

クララン、 1948年6月12日  
ヴィラ・ラムペリユール (皇帝荘)

E. ロート博士 (注1)

ブージー・アンド・ホークス社 (注2)

リージェント・ストリート 295番地

ロンドン市 N. W. 1

親愛なるロート博士、

いろいろ熟慮した結果、私はザルツブルグではなく、11月のウィーンでの最初の演奏会でバルトークの《管弦楽のための協奏曲》を指揮することに決めました(注3)。とはいえ、私はハンス・プフィッツナーを忘れるわけにはいきません。彼の非ナチ化裁判の良い結果と彼の年齢を考慮して(彼はミュンヘン近郊の救貧院で暮しています)、《パレストリーナからの3つの前奏曲》も指揮するつもりです(注4)。それと(リヒャルト)シュトラウスの《オーボエ協奏曲》もです(注5)。でもシュトラウスの《オーボエ協奏曲》とバルトークでは多過ぎるでしょう。ですからこの演奏会では、貴社が出版された楽譜に限りますと、シュトラウスのオーボエ協奏曲とペトルーシュカの新版(注6)を使いたいと存じます。私がこれらの楽譜を、ザルツブルグに持参出来ますように(7月20日頃出発の予定です)、貴殿がここスイスにお送り下さるか、或いは直接ザルツブルグに送って頂いた旨をご確認くださいと、大変ありがたいのですが。スコア貸出料のお支払については、ザルツブルグ音楽祭当局と直接交渉して下さい。

今現在手元にあるバルトークの《管弦楽のための協奏曲》の楽譜は、それまでお入用でなければ、ウィーンへの旅に持参したいと考えています。もしすぐにご返却の必要があれば、送付先をご連絡下さい。

私は貴殿とここスイスで8月にお会い出来れば、大変幸甚に存じます。私のルツェルン音楽祭での演奏会は、8月18、28、29日です(注7)。

(注8)

追伸 私はオーボエ協奏曲もウィーンで指揮したいと考えております。

追伸 お手紙の中で言及された楽譜は未着です。(この手書きの追伸は、おそらくフルトヴェングラーの秘書によるものと思われるが、署名は読み取れなかった。)



Ihr  
R. Schtrauss  
16 JUN 1948

(注1) 受取人のエルンスト・ロート博士は当時のオーストリア=ハンガリー帝国のプラハに生まれた(1896)。第一次大戦後ウィーンでウィーン・フィルハーモニー出版を主宰し、モーツァルト、シューベルト、シューマン、ブラームスのピアノ編曲版を出版する傍ら、100以上の記事を書き、小説も3冊書いている。ユダヤ人であったので、1938年にロンドンに逃れ、ブージー・アンド・ホークス社でバッハ、ベートーヴェン、モーツァルトのピアノ版を作り、またブリテン、コダーイ、ストラヴィンスキーなどのオペラや合唱曲のドイツ語版も出版する一方、1943年1月にR.シュトラウスの版権を取得し、1946年には周囲の反対を押し切ってR.シュトラウス祝祭を組織している。1949年から1964年までブージー・アンド・ホークス社の総支配人を勤めた。邦訳書「プラハからロンドンまで—ある音楽出版者の足跡」がある。

(注2) 1930年創立の楽譜出版社。クラシック音楽部門では、今も世界最大手。

(注3) その後予定が変更になったようで、11月にウィーンで演奏会は行われていない。バルトークのこの曲をフルトヴェングラーが初めて指揮したのは1950年4月23日、ブエノスアイレスのテアトロ・コロンの於いてであった。

(注4) この曲は後記する(注6)の《ペトルーシュカ》と同時に、1948年8月5日にザルツブルグ音楽祭でVPOと演奏した。なおプフィッツナーは1949年5月22日に没した。

(注5) この曲は、手紙の約半年後の1948年12月18~20日にVPOと演奏した。

(注6) 《ペトルーシュカ》はこの手紙の約2か月後の1948年8月5日にザルツブルグ音楽祭でVPOと演奏している。残念ながら録音は残っていない。

(注7) ルツェルン音楽祭での演奏会は、この手紙の通りの日程で行われた。

(注8) 珍しく名前の前に“ドクター”の称号を書き記している。

Clarens, den 12. Juni 1948.  
Villa l'Empereur.

Herrn Dr. E. Roth,  
Boosey & Hawkes,  
295, Regent Street

London N.W.1

Lieber Herr Dr. Roth,

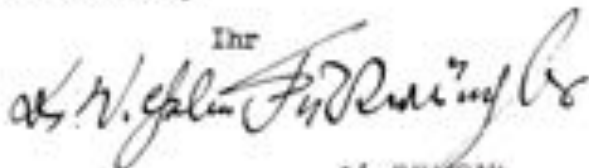
Nach langen Hin und Her habe ich mich nun doch entschlossen, das Konzert für Orchester von Bartók in meinem ersten Konzert in Wien im November zur Aufführung zu bringen und nicht in Salzburg. Ich möchte nämlich mit Rücksicht auf seine glücklich erfolgte Denazifizierung und auf sein Alter (er lebt in einem Armenhaus bei München) in diesem Konzert nicht versäumen, an Hans Pfitzner zu erinnern, von dem ich 3 Vorspiele zu Palestrina bringen will. Diese mit dem Oboenkoncert von Strauss und Bartók wäre wohl zu viel. Von Werken Ihres Verlages nehme ich daher in diesem Konzert das Oboenkoncert von Strauss und die neue Fassung von Petruschka. Ich wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie mir das Material dazu hierher in die Schweiz schickten, damit ich es bei meiner Reise nach Salzburg (etwa 20. Juli) mitnehmen könnte, oder wenn Sie mir bestätigten, dass es direkt nach Salzburg gesandt wurde. Verhandlungen wegen der Leihgebühren müssten Sie mit dem Salzburger Festspielhaus direkt führen.

Das Material von Bartók Konzert für Orchester, das ich noch hier bei mir habe, würde ich, wenn es bis dahin nicht gebraucht wird, im November mit nach Wien nehmen. Andernfalls bitte ich um Nachricht, wohin ich es schicken soll.

Ich werde mich sehr freuen, Sie im August hier in der Schweiz zu sehen. Meine Luzerner Konzerte sind am 18./28. und 29. August.

Mit schönsten Grüßen,

Ihr



16 JUN 1948

P.S. Das Oboenkoncert möchte ich dann auch in Wien machen.

P.S.

Das in Ihrem Brief angekündigte Material ist  
hier noch nicht eingetroffen  
mit bestem Glauben  
H. Pfitzner.

《 お 願 い ・ お 断 り 》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。

◎郵便振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！

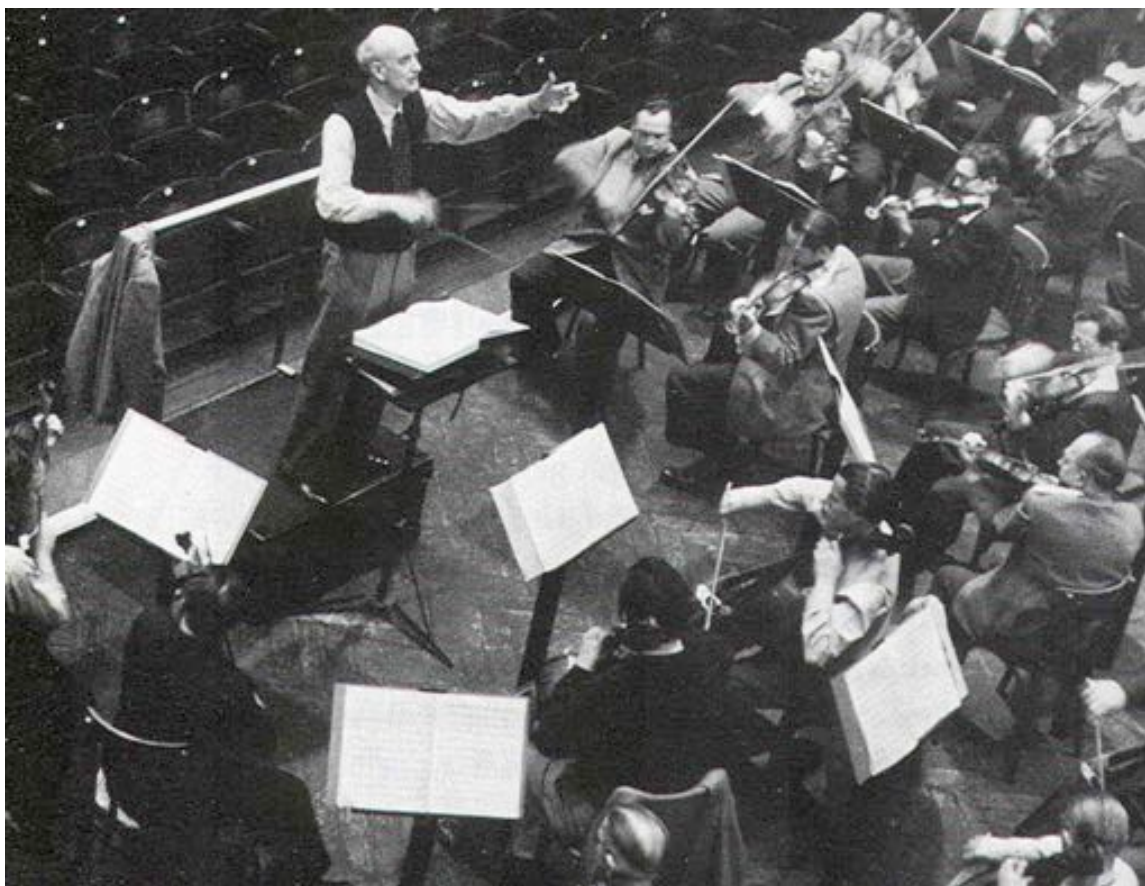
**センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。**

◎海外協会のものにつきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいております。フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないような損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦ください。

◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。

◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルハーモニー（1948年）

フルトヴェングラー・センター会報第48号 発行日 2017年5月

発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士 名誉顧問：ヴァルター・バリリ

名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン アドヴァイザー：ヘニング・スミット（オルセン）

顧問：松山浩介

会長：理事 中村政行 理事：鈴木芳雄、呼川秀邦、市川悠一、大橋陽一郎、薬師寺純平、中村匠一（音響担当） 監事：鹿内浩胤

チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドヴァイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-660-33-444

郵便振込口座 00240-9-111630 E-mail: info@furt-centre.com URL: furt-centre.com